

私が松江に赴任して間もないころ、地元の人から「松江の人を『敷居が高い』と感じることはないか?」とよく尋ねられた。

そんなことは感じない。第一、子どもたちが見知らぬ大人たちに「おはようございます」と声をかけてくれるのではないか。ここには日本の原風景があり、温かい人たちがいる。よそのものといっても、同じ日本人、誠意と真心をもってすれば、ちゃんと受け入れてもらえる。もっとも、私の持ち前の「鈍感力」ゆえ、かもしれないが。

「珍獣」として街の人にかわいがっていただき

ながら、ずうずうしくも市内のいろいろなイベントに参加させていたのだ。

一昨年の9月、市民活動センターで開かれた市民活動フェスタでは、浜田真理子さんらのトークショーに参加。せっかくなので翌年は松江駅で同フェスタの前宣伝を行い、本番にも2度目の参加をした。ワンマンショーの時間まで与えられていたのには驚いたが、街と駅とがつながっていると感じられた。本当にありがたいと思う。

ある会で、落語家の桂

## 腹を割ったつきあい重要



市民活動フェスタに2年続けて参加。街と駅のつながりを実感した—2012年9月、松江市白濁本町の市民活動センター

### 敷居をつくるのは誰?

三段さんの前座をしたこともあった。笑いを誘うには本音で語るしかない。「嫌われてもいい」と、よそもの視線で島根を語ってみると、どっとウケた。ネタとしての「突っ込みどころ」があるということ、島根は

それだけ「資源」が豊富なこと。そんな島根が大好きなのは、私も、人気アニメキャラ「吉田くん」も一緒だ。真面目な講演の場にも随分呼んでいた。私の前職が本社の経営計画担当であったのがこれ

ていただいた。もちろん私にとっても、ご質問やご意見も拜聴できる貴重な機会となった。

相手に対して敷居が高いと言う前に、敷居をつくってしまっているのは、実は自分自身かもしれない。今はそう考えるようにしている。JRなど、その典型であったろう。

ただ、自分の敷居を下げるには、まずは自分の周りをじっくり見渡して、何度も歩き、理解し、落ちていくものも拾ってなめてみながら、お互いが気兼ねをしない環境を整える必要がある。そのためにも腹を割ったコミュニケーションが何よりも重要だと思う。

出雲弁を聞き、関西弁で返す。そして一緒に笑う! これが大事だ。

(内山興、前JR松江駅長・現JR松江支店長)  
 第2、4月曜掲載

